



[事務局からのお知らせ]

彙報

◎新入会員の紹介について

学会への入会は、通常会員または国外会員1名の紹介により、定例理事会(年2回、5月と10月に開催)において審議・決定し、評議員会において承認された後、初年度の会費納入を以て、会員資格が発効します。

入会資格は、文学・語学、哲学・思想他、中国に関連する諸領域の教育・研究に従事する者、またこれらの領域を専攻した大学等の卒業生となっています。

入会申し込みは、日本中国学会 HP(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj3/index.html>)にある書式をプリントアウトの上、学会事務局宛(〒113-0034 文京区湯島1-4-25 斯

文会館内)にご郵送ください。本年度5月分の申し込みは5月1日(金)必着、10月分は10月1日(木)必着でお願いします。

毎年多くの住所不明者が発生しております。入会后、転居・所属変更(留学生の場合は帰国)の際には速やかに事務局まで届け出るよう助言の労をお取りください。ご紹介者に照会させていただくこともございますので、その旨ご了承ください。

◎会費の納入について

会費が未納となっている方は、至急お納めいただきますようお願いいたします。2カ年にわたって会費が未納となりますと、『学会報』が送付されません。さらに4年間滞納の会員は除名になりますので、ご注意ください。

郵便振替口座：00160-9-89927

メールアドレス：ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp

若手と古手

理事長 池田 知久

自分がもう若手ではないと感じ始めたのは、いつごろからであったかと思い出してみる。やはり停年退職（私の場合は還暦とほぼ同じ）のカウント・ダウンを、自分ではなく周囲が勝手に始めたころ、つまり五十代半ばあたりではなかったろうか。普通にはほぼ同じころ、初孫が生まれて家族から「おじいちゃん」「おばあちゃん」などと呼ばれるようになるが、こうなると年寄り意識はますます進行する。また、中国人と家族ぐるみにつきあいをしていると、私の経験ではやはり五十代半ばあたりから、中国人の子供に「爺爺」と呼ばれることが多くなる。そんな時、あの『論語』為政篇の「五十にして天命を知る」とか、「六十にして耳順う」とかの言葉が、脳裏に浮かんでこないわけではないが、しかし、これらは状況に適合する言葉という感じがしない。『論語』の五十・六十が自律的内在的に得た加齢意識であるのに対して、私のは他律的外在的に与えられた年寄り意識でしかないからであろうか。

それ以前の今から十数年前は、肉体的にもそれほど衰えはなく、精神的にも緊張しており、また何よりも有力な老大家が何人も第一線で活躍しておられたし、それに自分の学問に対する未達成感・不満足感がくすぶっていたので、自ずから若手であると意識していたように思う。私にとって若手と意識するとは、まだ上があるのでそれを目指して努力すべきであり、努力し甲斐もあるはずとする自戒の念であったかもしれない。こうした自己意識については、六十代半ばを過ぎた今日でも大きな変化はない。自律的内在的には自分をまだ未達成・不満足と痛感していて、『論語』で言えば、「十有五にして学に志す」はクリアできたとして、「三十にして立つ」から「四十にして惑わず」にかけてを、依然としてさまよっているというのが、偽らぬ実感なのである。

しかし、肉体の衰えとそれに由来する精神の衰え

は確実に進行しており、加えて周囲から、例えば「後期高齢者」などといったカウント・ダウンのかけ声がかかります大音量のノイズとなって迫ってくる。年金の説明を受け年金をもらい、介護保険料を支払い「バスや電車で1人で外出していますか」「この1年間に転んだことがありますか」などという生活機能調査に答えていると、いやでも応でも年寄り意識が強化されてしまう。このような大音量のノイズを浴びせかけて古手を萎縮させるシステムは、現代日本社会に特有なものであって、日本でも以前にはなかったことであろう。若手は有用、古手は無用とする考えは、現代日本社会のすみずみにまで浸透しているのだ。その背景には、現代日本社会が非常に大きな変動の時代を迎えている、という事実があるのだと思われる。

こういう経緯があった後の、自律的内在的な若手願望と他律的外在的な年寄り意識との複合が、今の自分なのではないかと思う。若手と名乗るのはおこがましいが、かと言って年寄り扱いされるのもご免蒙りたい。とにかく難しい年ごろなのである。あの『論語』為政篇の「故きを温めて新しきを知れば、以て師と為る可し。」において、孔子は「古き」と「新しき」の両方をともに肯定して二股をかけているが、彼の心の奥底には我々と同じようなアンビヴァレンスが潜んでいて、そこからこう唱えたのではないかとも憶測される。その背景に古代中国社会の巨大な変動の時代があるのは、言うまでもない。

話を中国研究の学問に対する態度に移すならば、根本的には研究者の価値観のいかに帰着する方法論については、古手意識が芽生え始めたころから、若手研究者や次世代研究者の意向・意欲を、なるべく尊重してそれを邪魔しないように努めてきた。と言えば聞こえはよいが、実際は自由放任、無視ない

し軽視してきた。なぜなら、自分自身の体験から言っても、学部学生・大学院生であったところから、確立した方法論を有する古手研究者に反撥しそれを批判しながら、自己形成をしてきたという思いがあるからである。古手の先輩としては、その問題にまでは口を出さずに、有為な若手をもっと大きなスケールで自分の道を見出してほしい、というのが念願であり、現代日本の激しい変動の時代状況の中で、この点はますます強くなっている。

とは言うものの、今から振り返ってみれば、我々の方にも誤解や混乱があった。

一つには、古手が大きな研究成果とそれを可能にする方法論を前面に振りかざして、追撃してくる若手の前に立ちはだかり、若手の方も実力を着けてそれを凌駕し突破していくといったような、世代間の厳しい切磋琢磨がなければ、若手の成長もありえず学問の進化も望むことはできない。これは今さら改めて言うのも憚られる当たり前のことだ。

しかし、近年の日本社会や大学の実際は、私の見聞する小さな生活領域に限ってみても、若手に対してあまりに過保護である。物分かりのよい古手が若手の負担を軽くしてやるために、さまざまの手立てを考え手取り足取りで保護しているが、このやり方で日本社会の将来、中国研究の将来は大丈夫なのかと甚だ心配になる。若手を育てるためにどういう訓練を行うかを考えるよりも、色々手立てを尽くして若手を守るのがヒューマニズムであると見なしたり、若手を保護しないと周囲から批判を受けたり、学生から嫌われ学生が去っていったり、といった類の混乱が大量に発生している。このようなやり方を続けていると、若手は成長せず、古手は疲弊して、引いては学問も沈没してしまうのではないかと怖くなってくる。

二つには、中国研究のディシプリン（訓練法）として誰しも必要・不可欠と認めるものは、(A)古代漢語（漢文）ないし現代漢語（中国語）の読解力を用いて、研究対象たる資料の内容・意義を正確に把握すること、(B)あらゆる形而上学・イデオロギーの思いこみを排して、確実な資料の示す事実を根拠にして立論するという実証主義、(C)研究対象に関する先行の著書・論文の主なものをよく検討し、それらを批判的に踏まえて自らの新説を提起すること、

の三点に指を屈するであろう。これも今さらめく議論であることは承知している。ともあれ、以上の三点、短く言えば、(A)漢文・中国語による資料の正確な読解、(B)確実な事実を根拠にして立論する実証主義、(C)先人の仕事を踏まえる研究史の総括・参照は、中国研究に携わる者が若手・古手を問わず誰しも認める最大公約数的なディシプリンと言ってよい。これら以外にもまだ他にあるとか、これらは深いところで方法論に結びつくので、本当はもっと複雑・微妙であるとか、といった種々の問題があるのは確かであるけれども、ここでは割り切って単純化しておく。そして、乱暴な意見を述べることを許してもらえば、今日の普通の考えでは、(19世紀の西欧世界における実証主義の問題は別として)これらは研究者の価値観に帰着する方法論とはおおむね無関係である。しかしながら、私自身の体験に照らして言えば、以上のディシプリンに対する誤解や、それと方法論との相異についての混乱があったと思うのである。そのために、古手は若手に以上の三点の不足がある場合でも、禁欲して口出しを遠慮するところがあったように感じられる。

以上のディシプリンは、特に中国研究という学問では、修得するのに相当年季のかかるものであるから、若手にとって不得意な項目である。実際、あれこれの学会において投稿論文の審査をさせられる時、若手の論文の中に、以下のような不備を発見することが少なくない。——(A)漢文・中国語の資料が正確に読んでいない箇所がある。古文字の判読・通仮を誤っているなどという場合も、その具体的な一例である。(B)立論に必要な他の重要資料の存在を見落としたり、または意識的に無視したりするために、論旨の説得性に重大な影響が出ている場合がある。(C)個々の具体的テーマまたは全体的課題について、先人が論著の中ですでに解決しているにもかかわらず、それを見落としている場合がある。そして、こういった不備があり論文として致命的でさえあっても、合格して学術論文と認められてしまうことが、ないわけではない。そこには、価値観の自由主義に鋭敏に反応する世代である古手の中に、ディシプリンの修得度と方法論の自由との相異に関する、誤解や混乱があるのではなからうか。これらのディシプリンについては、古手はしっかりと教え伝える方が

よいし、若手は遠慮なく習い受ける方がよい。

方法論という項目になると、これはほとんど若手の独壇場である。既存の中国研究を革新したいと思う有為の研究者が考えるやり方は、一つには、外面では、採用する資料を新たにして旧来の学説をひっくり返すというやり方がある。近年盛行している、出土資料を用いた思想史・歴史学・語学の研究がこのタイプである。二つには、内面では、こちらの見方・考え方を変える、すなわち採用する方法論を新たにするというやり方がある。戦前の経学的方法論を排して、中国思想史の方法論によった戦後の研究がこのタイプである。前者は若手は勿論、古手も行いうるやり方であるが、後者は確立した古手には無理で、若手のみが行いうるやり方と言って差し支えない。それ故、学界全体として、後者の面での若手の自由・闊達な問題提起が望まれるというのが、今日の状況であろう。たまさか新しい方法論に基づいて対象の真実をあざやかに切り取った若手の論文を読むと、その柔軟な頭脳に激しい羨望の懐を抱いたり、新奇な行論振りに抵抗を感じて賛否を保留したりと、反応はさまざまではあるが、結局、頭がそれについていけない自らの頑迷固陋を慄むことになる。恐らくいつの時代でも、世代間のギャップとはこうしたものであろう。

私の愛読書である『莊子』の寓言篇には、作者の語る真実の言（理論）が、

寓言は十の九、重言は十の七、卮言は日に出て、和するに天倪を以てす。

とまとめられている（この三言は天下篇にも出る）。この内、第二の「重言」（年寄りの言葉に借りて重みをつけた理論）については、直ぐ下に、

重言の十に七なるは、言を已す所以なり。是れ耆艾にして年先んずるが為めなり。而れども経緯・本末の以て年耆に期うこと无き者は、是れ先んずるに非ざるなり。人にして以て人に先んずること无きは、人道无きなり。人にして人道无きもの、是れを之れ陳人と謂う。
（重言が十分の七を占めるのは、言いたいこと

を徹底させるためである。なぜ言いたいことが徹底されるのかと言えば、長老・先輩の言葉を借りて述べるからだ。しかし、その言葉に長老・先輩にふさわしい筋道・秩序が具わっていない者は、先達と見なすわけにはいかない。年寄りでありながら人々の先達となる器量がないのは、人の道をもたないものであり、人でありながら人の道をもたない者は、これを老いぼれと呼ぶ。）

と解説されている。自分の主義主張を自分の言葉として述べるのではなく、年寄りの「重言」に仮託して述べようということに関しては、その社会的基盤があれこれと推測されよう。例えば、この文章が綴られたころ、中国社会はすでに変動の時代から抜け出て、人々の価値観が固定化しつつあったので、曲がりなりにも年寄りの言葉を重んずる安定期の旧習に戻ったのであろうとか、激しい変動の時代ではあったにしても、中国古代は大局的には巨大な農耕社会であって、そこでは年寄りを重んずる旧習が連続として続いていたのであろうとか、等々。（ちなみに、人間世篇の顔回・仲尼問答では、この「重言」に類する「古と徒と為る」という説得法がにべもなく否定されているが、人間世篇の方が『莊子』本来の思想であると考えられる。）しかしながら、表面的には古手を重んずるかのように装ってはいるものの、若手である寓言篇作者の古手に対する態度は、実はひどく手厳しい。年寄りがその身に「人の道」を具え「人に先んずる」器量を有することを求めているが、このハードルを何とか越えられる者は多くはあるまい。その上で、作者はそのような年寄りの当代社会における権威を利用してしまおうと言う。このような内容の「重言」は、作者自らの胸に抱く「言いたいこと」つまり独自の強烈な主義主張を、当代社会の人々に向かって効果的に提唱し説得するという目的の、単なる手段にすぎないかもしれない。とすれば、当然のことながら、現代の学問的表現や理論的言説とは様相が異なってくる。そして、この手段が結局、『莊子』作者の思惑どおりに成功したのか否か、我々には分からない。ただ、まちがいに確かだと思われることは、これが若手から古手に向かってしかけた、世代間の切磋琢磨の最も早い一例であることである。

副理事長退任にあたっての所感こもごも

池田 秀三

本年三月末をもって副理事長を退くこととなった。退任にあたって、会員の皆様にご挨拶申し上げよとの出版委員会委員長からのご下命である。「堪忍してよ」と思ったが、委員長は副理事長退任の挨拶は「故事」として宣う。そう言われれば、以前、金・藤井両元副理事長が書かれたものを拝読した覚えがある（ような気がする）し、参考のためにと探し出した「學會便り」（2007年第1号）には大上前副理事長のものされた一文が掲載されている。というわけで、お断りもならず、書くことを了承したのだが、何を書けばいいのか、はたと困惑した。原稿の締め切り日も近づき、取り敢えずワープロに向かったものの、書くべきほどのことはやはり何も思い浮かばない。いやはや困った。

普通に考えれば、任期中に行った仕事の報告をすればよいのであろう。が、実は、何もしていないのである。したことと言えば、定例の理事会に出席したことと、所管の委員会の会議にオブザーバーとして出席したことぐらいである（副理事長は各種委員会と理事長の連絡役として、それぞれ3もしくは4つの委員会を担当することになっている。私の担当は大会委員会・論文審査委員会・将来計画特別委員会の3つであった）。要するに会議に出ただけのことである。しかもそれらの各委員会の活動状況・実績は「學會便り」の中で各委員長から随時報告がなされており、私が別途報告すべきことは何もない。理事会や委員会の出席に加えて、電話やメール等により、理事長から急ぎの案件について諮問されることは数回あったが、それも広い意味での会議（いわゆる持ち回り）であるから、結局のところ、会議に出ただけという実態に変わりはないし、その諮問の結果については、理事長から適宜報告があるはずである。というわけで、副理事長職の実績としてここでとくに披露すべきことなど、どうあがいても出

てこないのである。副理事長とは員に備わるのみの、かくも曖昧模糊とした存在なのである。ただ、もう一人の副理事長、竹下さんの名誉のために言っておかねばならないが、竹下さんは在京で、しかも会計を担当されたのでかなりお忙しく、ある程度は実質を伴った副理事長であった。が、少なくとも私は、上述のとおり鶴的存在であった。やっているときは何かしらやっているような気がしていたが、こうして任を終えてみると、副理事長って一体何だったんだろうという思いが強い。

さて、だしに使うてまことに申し訳ないのだが、前述の大上さんの挨拶文は「よく分からないままに」と題されており、その末尾で「分からないままに担当し、分からないままに任期を終える。…任期を終えて責任上？書かなければならないから、これでも気持ちと主張は抑えて無理矢理書いた」と述べておられる。大上さんもやはり、副理事長の職務内容はよくわからなかったようであり、退任の挨拶文の執筆には相当苦勞されたことがうかがえる。大上さんは副理事長を3期6年務められた有能な方であり、実際、副理事長として学会に多くの貢献をされた。その氏にして副理事長とは何をやるのかよくわからなかったと言われているのだから、たった1期2年しか務めなかった私ごときがわかるはずもない。とすれば、ここで書くべきことはただ一つ、私ごとき無能の者が副理事長の職にあったために学会に与えたであろう迷惑を同僚の理事、事務局の方々、そして広く会員諸氏全てにお詫び申し上げること以外にはない。どうも役立たずで申し訳ありませんでした。

と、謝ったところでこの一文を閉じたいのだが、まだ求められた枚数の半分しかない。もはや副理事長の退任の挨拶文として書くことなど何も残っていないので、またも大上さんの掣みにならって、「私的なつぶやき」をしたためることでお茶を濁させて

いただくこととする（大上さん、何度もだしにしてご免なさい）。

我が師湯浅幸孫先生は、「学会なんてそんなに大事なものではない。若い人が利用すればいいだけのものだ」という趣旨のことをよく口にされていた。先生は腹藏のない方であったから、これはご本心であったと思われる。事実、先生は学会活動には熱心ではなかった。学会が大事なものかいなかはさて置くとして、それが若い人が利用するためにあるものだという点は、私もまったく同感である。だから、若い院生クラスの人たちに学会への忠誠心はおろか、帰属意識さえ求めようとは毛頭思わない。若い人たちの学会の利用価値の第一は『日本中国学会報』への投稿権であろう。馬鹿げた業績主義は今後も益々はびこるであろうから、この投稿権の需要も益々高まるであろうが、逆に数回落選すれば、学会を辞めてしまうひとが出る怖れはある。しかし、それはやむを得まい。また外国人留学生をはじめから終生の会員になるつもりなどなく、日本にいる間に業績を挙げておく目的で一時的に入会している人も少なくないであろう。これも私は何ら構わないと考える（ただし、退会手続きだけはきちんとしておいて欲しい。行方不明が一番困るのである。仄聞するところでは、会費を四年間払わなければ自動退会になると、故意に支払いや転居通知をしない者が、若い人のみならず、年配の会員にもいるらしい。それは研究者以前の、人間として失格である）。

若い会員の退会は学会の高齢化や会員総数の減少につながるかもしれないが、それもまた致し方ない仕儀と私は考えている。財政的困難に陥るほどの大幅減は問題であろうが、学会はむしろこちんまりとしているほうがいい。中国古典学の将来はもうはっきり見えているのだし、また学術会議や学振に対する発言力などどうでもいいじゃないか、というのが私の本音なのである（学会の役員が吐く台詞ではないことは承知しているが、これはあくまで「私的なつぶやき」である）。量的拡大を目指すより、こちんまりとした学会として質の維持を図るという行き方もあるのではあるまいか。

ようやく求められた枚数に近づいたので、最後にこの紙面を借りて、弊学で開催された第60大会へのご協力を感謝申し上げたい。500名を超える参加者

は私どもの予想以上であり、少なくとも規模の上では盛会となったこと、ありがたく御礼申し上げます。お蔭様で皆様からも好評いただいた。外交辞令も混じっているように、率直に言ってホッとしているところである。ただ、閉会の辞でも申し上げたように、今回の大会では意図的に簡略化を図ったところがある。それは大会と言えば、何か仰々しくセレモニーをやらなければいけないという強迫観念があり、その観念が多くに大学に大会開催校となることを逡巡させている原因の一つとなっているのではないかと感じたからである。京大はこんないい加減なやり方でも曲がりなりにやりおった。これならうちでもやれるのではないかと、思っていたら、手を抜いた甲斐があるとういものである。これからは是非未開催校に積極的に開催していただきたいと願っている。

私個人としては、とにもかくにも大会開催準備会代表と副理事長を務め終えた。これで後ろ指を指されずに、いつでも学会を辞められる！その日を待望する日々である。

第14回唐代文学会に参加して

広島大学非常勤講師 中木 愛

2008年10月25日～29日、安徽省蕪湖市の安徽師範大学および黄山市の黄山国際大酒店において、唐代文学会（中国唐代文学会第14届年会暨国際學術研討会）が開催された。受付で配布された参加者名簿によると、本大会への参加者は125名。うち、台湾9名、香港1名、シンガポール1名、マレーシア1名、ニュージーランド1名、韓国5名で、日本からは、下定雅弘氏（岡山大）・浅見洋二氏（大阪大）・佐藤浩一氏（早稲田大非常勤）・高橋幸吉氏（慶応大）・益西拉姆氏（二松学舎大学院生）と筆者の6名が参加した。

25日午前、安徽師範大学田家炳教育書院報告庁において、同文学学院院长・胡伝志氏の司会のもと、開幕式が行われた。唐代文学会副会長・董乃斌氏（上海大）による開会の辞に続き、大会テーマ発言では、まず下定氏が、日本における唐代文学研究の近況を報告された。台湾の近況は、何寄澎氏（台湾大）が報告され、台湾にも日本ほど大規模ではないが中唐文学会があり、仏教や禅に関する研究が深まっているという内容が印象的だった。また、葛曉音氏（北京大）が、『詩経』から六朝に到る詩体について、ご自身の研究成果を報告され、三秦出版社の淡懿誠氏が、近年盛んに報告されている出土文献と唐代文学研究の現況を述べられた。

討論会の会場は、25日午後～26日午前が安徽師範大学構内の鉄山賓館。26日午後に黄山市へ4時間弱のバス移動の後、27日午前の討論会および午後の閉幕式が、黄山国際大酒店で行われた。参加者は、大会2ヶ月前に提出した論文の内容によって、3つの組に分けられ、莫礪鋒（南京大）・戴偉華（河南師範大）両氏を代表とする第1組（43名）は、初唐から盛唐にかけての内容が中心で、日本からは佐藤氏が参加した。趙昌平（上海古籍出版社）・尚永亮（武漢大）両氏を代表とする第2組（42名）は、主に中

唐の内容で、下定・高橋・益西拉姆各氏と筆者が参加、張明非（広西師範大）・李浩（西北大）両氏を代表とする第3組（40名）は、詩の題材、ジャンル、詩体、仏教、文化背景や小説に関する論が集まり、浅見氏が参加した。

各組ともに、更に6つのグループに分けられ、1グループ100分に、約7名の発表者が割り当てられた。一人あたりの発表時間は10分程度、7名全員の発表が終わった後、残りの20分でまとめて討論をするという形式だった。発表時間は、毎回、参加者の数や司会者の方針等によって変動があるようだが、今回筆者が参加した第2組では、なるべく討論の時間を確保しよう、時間を均等に配分しようとの配慮から、比較的制限が厳しかったようである。時間をオーバーすると、茶杯の蓋をティンティーンと叩いて発言を終えるよう促され、終了時間ぎりぎりまで白熱した討論が続いた。ただ、具体的な発表時間や何組に参加するのかといった詳細が、当日になるまで知らされなかったため、初参加の身には戸惑いや不安も感じた。

2組の発表は、とりわけ元和期に関する内容が集中した（韓愈6篇・賈島3篇・白居易8篇・張籍2篇・柳宗元4篇）が、研究テーマは、詩人の経歴・交遊・思想、詩の芸術的価値、受容史、詩論、文体など幅広く、問題意識の明確さ、テキストに即した緻密な考証、視点の新しさ、歴史面からの考察といった点に特徴が見られたようだ。例えば、益西拉姆「賈島之詩人形象—在虚与実之間」は、現在の賈島に対する人物像が十世紀中頃以降に確立する経緯や、賈島と無本が同一人物ではない可能性を、劉明華（西南大）「關於張籍『節婦吟』的本事及異文等問題探討」は、張籍「節婦吟」が入幕辞退を詠んだものであるという従来の解釈が、宋代以降に成立したことを指摘した。下定雅弘「試論『鶯鶯伝』の主題—兼

論与「情賦」的關係一」は、「鶯鶯伝」のテーマを、志怪小説の流れではなく「情賦」の系譜において捉える試みであり、蔡瑜（台湾大）「詩析王昌齡「詩格」的「身—境」論」は、王昌齡の詩論について、「物境」「情境」「意境」に加えて、「身境」という新しい角度から分析を加えたもので、新鮮な視点が注目を浴びた。潘務正（安徽師範大）「明清翰林院祠祀韓愈考」は、韓愈が翰林院において祭られるようになった経緯を考察した。白居易研究の増加も、近年目立った傾向のようで、尚永亮（武漢大）「白俗」論及其在兩宋の流変」や曹淑娟（台湾大）「白居易的江湖体験与廬山草堂的空間建構」をはじめ、筆者も「白居易閑適詩中對於生理層次舒適感的表現—試論中唐詩歌の創新精神—」という題目で発表した。大会参加者の論文は、例年どおり『唐代文学研究』（広西師範大学出版社）として刊行される。

このほか2組では、出土文献と受容史研究の問題が話題となった。近年は、墓誌など夥しい数の資料が出土しており、正式に発表されただけでも数千を超えるという。中には、一昨年話題になった韋応物の墓誌など、非常に高い価値を持つものも含まれるが、韓愈のように高い原稿料によって執筆を依頼されるケースもあるため、とりわけ中唐以降は、墓誌の商品化・商業化といった社会的背景を加味して判断する必要がある。受容史研究では、後世への影響が多く取り上げられるのに対し、先行文学からの影響があまり考察されず、一面的である。そして、作品の第一読者の評価が、後世に絶対的な影響を与えることを認識する必要があり、受容者の個性や思想、社会背景も加味するべきだといった指摘があった。

また、本大会では、1984年から副会長を、1992年から会長を務めておられた傅璇琮氏（中華書局）が名誉会長に退かれ、陳尚君氏（復旦大）が新しい会長に選出された。傅璇琮氏は、閉会式において、学会の更なる発展と海外交流の一層の充実を希求されるとともに、本大会とは別に、もう少し専門テーマを絞った小規模な討論の場を設けてはどうかと述べられた。

筆者は、今回初めて中国の学会に参加したが、多くの面で驚きの連続だった。日本の学会は、論文を仕上げる途中での構想発表という色合いが濃いのが、中国の場合、完成した論文の紹介、最終チェックと

いった意味を持つようである。参加者は全員、論文を持参して発表することが求められ、年齢層は40代以上の大学者が大半を占めているようだった。本大会も、一部主催校の傍聴を除いて、一般の学生は参加できないそうである。内容面の印象は、テキストの個別の解釈を問題にした発表はあまり見られず、解釈は大前提として参加者の中に共有された上での、更なる議論が展開されていた。マクロな視点からの考察は、筆者が平素から一番の課題として痛感しているものなので、白熱した討論を目の当たりにできたことは刺激的であり、自分の発表内容（白居易の閑適詩）に関しても、宋代における受容という大きな枠組みで捉えるべきだという貴重な指摘を頂くことができた。一方でまた、大会中は、多くの参加者の口から「精細的考証」「以文本為中心」といった言葉を耳にし、テキストに即した緻密な考証の必要性が、改めて認識されているように感じた。日本人の目を通してこそできる細やかな読解、一字一句の解釈を追究する研究スタイルが、今後大陸においても一層重視されるのではないだろうか。

閉会式の後は宴会が催され、参加者による歌や踊りの余興も加わって、こちらも、日本では経験したことのない盛り上がりようだった。翌28日は、2000年に世界遺産に登録された安徽古村落的西逸と宏村を、29日は黄山を観光し、和気藹々とした雰囲気の中、討論会とはまた別の形の交流を楽しむことができた。中国の学会への参加は、提出論文の他にも、言葉の問題、渡航費用、体力面、日程調整など、克服しなければならない問題が多いが、それだけに中身の濃い充実した時間であった。また参加できるように、今度はもう少し聴き取れるように、そして討論にも参加できるように、研究・語学ともに研鑽を積まなければならないと思う。次回は、2010年に新疆で行われるとのことである。

村上哲見氏、 恩賜賞・日本学士院賞受賞の お知らせ

理事長 池田 知久

本学会会員村上哲見氏（東北大学名誉教授）が平成21年度恩賜賞・日本学士院賞を受賞されることになりました。

村上哲見氏は、昭和5年7月18日、中国大連市に生まれ、昭和28年3月京都大学文学部（旧制）中国語学中国文学専攻を卒業、同年4月同大学大学院文学研究科（旧制）に入学、昭和34年3月同研究科を退学、昭和49年1月、論文題目「北宋詞研究」をもって京都大学より文学博士の学位を授与されました。昭和34年4月、京都学芸大学講師に採用されて以来、東北大学教養部、奈良女子大学文学部において教鞭を執られ、昭和60年4月には東北大学文学部教授に転任、平成6年3月をもって停年により退職し、同年4月1日には東北大学名誉教授に就任されました。

村上氏の学術上の業績は幅広いものがありますが、学位申請論文が「北宋詞研究」であるところから理解されますように、中国韻文学、ことに「詞」の研究がその中心を占めています。この学位論文を主軸として出版されたのが『宋詞研究—唐五代北宋篇』（昭和51年）ですが、氏は本著刊行以来、孜孜としてその続編たる南宋篇刊行の準備に取りかかれ、ついに平成18年に至り、『宋詞研究—南宋篇』を公刊されました。今回の受賞はこの両書における「詞」研究の学術上の功績に対して授与されたものです。

氏は両書において、唐宋間の文学傾向の変化という巨視的な文学史的視点に立って、唐末・五代に始まり、北宋を経て南宋にいたる「詞」と称される抒情文学の発生・展開・成熟の歴史を、主要な作家の作風とその韻文様式の変遷を客観的な資料分析により、はじめて体系的に描き出すことに成功されました。この学術上の業績が顕著であると評価されて、今回の受賞に至ったものです。

中国文学研究者に対し、恩賜賞・日本学士院賞が授与されたのは、平成5年の田中一成会員以来16年ぶりのことであり、本学会にとっても大変栄誉あることと考えます。

村上哲見会員の受賞を心よりお祝いし、併せてますますのご健勝をお祈り申し上げます。

宮紀子会員の日本学士院 学術奨励賞受賞のお知らせ

副理事長 竹下 悦子

本学会会員宮紀子氏（京都大学人文科学研究所助教）が第5回日本学術振興会賞、並びに日本学士院学術奨励賞を受賞されました。

本学会では毎年、日本学術振興会に対して日本学術振興会賞の候補者を推薦しております。この賞は優れた若手研究者の顕彰と支援を目的として平成16年度に創設されたもので、本年度が第5回になります。本年度は大学等研究機関・学協会から374名の推薦があり、その中から24名が選ばれました。日本学士院学術奨励賞は、さらにこの日本学術振興会賞に選ばれた24名の中から数名が受賞するもので、今回の受賞者は6名でした。

宮会員の研究課題は「モンゴル時代の文化政策と出版活動」であり、『モンゴル時代の出版文化』等の論著において、北方遊牧民が漢土を支配した大元ウルス時代が、中国文化が破壊された「暗黒時代」ではなかった事実を、豊富な文献資料に基づいて明らかにした研究が評価を受けました。

授賞式は本年3月9日、日本学士院において挙行され、秋篠宮殿下御臨席のもと日本学術振興会理事長及び日本学士院長から賞牌・賞状等が授与されました。本学会からは池田理事長の代理として副理事長の竹下が参加いたしました。

人文学系からの受賞者は毎年少数であり（日本学術奨励賞においては本年度24名中4名）、その中から特に学士院奨励賞に選ばれたことは、本学会にとっても大変栄誉なことであり、また人文学の発展にとっても貴重な受賞だと考えます。

宮会員の受賞を心よりお祝い申し上げますと同時に、今後のご活躍を期待いたします。

各種委員会報告

[論文審査委員会]

委員長 土田 健次郎

I 学会報第61集応募論文の審査

2009年1月20日締め切りの応募論文は全40篇(哲学・思想部門14篇、文学・言語部門24篇、両部門にわたるもの2篇)であった。

2月1日に在京委員を中心に第2回論文審査委員会を開催し、例年通り、論文1篇につき3名の査読者(論文審査委員は含まない)と、1名の閲読者(論文審査委員が分担)を定めた。

3月29日に、第3回論文審査委員会を開催し、査読者3名の評価をもとに討議した結果、哲学・思想部門6篇(昨年は5篇)、文学・言語部門9篇(昨年は10篇)、両部門にわたるもの1篇(昨年は1篇)の掲載論文を決定した。なお慣例に従い池田秀三副理事長も陪席した。懸案になっている不採用論文に対する対応については、種々の意見が出たが合意にいたらず、今回も結果のみ通知することとなった。

例年執筆要領の規定を守らない投稿論文が目につく。具体的には枚数超過や、論文と要旨が4部提出されていないことなどである。今後さらに注意を喚起することになった。

II 学会報第62集依頼論文の執筆候補者

第3回委員会において、検討した結果、哲学・思想部、文学・言語部門からそれぞれ評議員1名(予備1名)、一般会員1名(予備1名)ずつを選び、5月開催予定の理事会に推薦することとした。

III 学会賞候補者の推薦

第3回委員会において、評議員の推薦アンケートをもとに審議した結果、哲学・思想部門、文学・言語部門ともに該当者無しとなった。

IV 平成21年度日本學術振興会賞候補者の推薦

第3回委員会において、評議員の推薦アンケートをもとに審議した結果、今回は推薦者無しとなった。

V 執筆要領の改訂

第3回委員会において、投稿者の連絡先を確認しておく必要から、投稿の際に連絡先を明記する旨を、執筆要領に記載する方向となった。

国内学会消息

平成20年1月1日～12月31日

◎北海道中国哲學會

1月28日

・戴東原「群」「欲」觀念的思想史回溯
國立臺灣大學中國文學系教授 鄭 吉雄

4月25日

・博士論文要旨發表會
北海道大學大学院文學研究科専門研究員 松本 武晃
北海道大學大学院文學研究科専門研究員 江尻 徹誠

5月30日

・白隱慧鶴の内観法について 佐藤 健太郎

6月27日

・『東坡易傳』に見える經濟觀念 加藤 眞司

7月25日

・明末淨土思想考察 江尻 徹誠

10月25日

・徂徠學再考
東北大學大学院文學研究科准教授 片岡 龍

10月31日

(卒業論文構想發表)
・揚雄の著述意圖—『法言について』— 三上 雄貴
(修士論文構想發表)
・山鹿素行の孫子諺義の研究 張 捷

11月28日

・臺灣留學について 關村 博道
[特別講演會]

10月27日

・14C～19Cの日本の學問の特色と、その變化—足利學校から考證學まで—
東北大學大学院文學研究科准教授 片岡 龍

[大會]

第38回大會

8月9日、於マリンヒルホテル小樽

・中國古代の形式的論理の記述とその構造(中國古代における措辭形式による論證) 近藤 浩之
・葛洪の『抱朴子』内篇著作の目的について

北海道情報大學經營情報學部教授 玉置 重俊

・汪克寬『春秋胡氏傳纂疏』と『春秋大全』 松本 武晃

・「隱」者の功用—邵雍と常秩

藤女子大學日本語・日本文學科教授 名畑 嘉則

・吉田篁墩『論語集解攷異』について 水上 雅晴

○刊行物

『中國哲學』第36號(8月)

(水上雅晴 記)

◎東北支那學例會

○2月例會

2月15日

(卒業論文・修士論文発表会、中文・中思分野のみ抜粋)

[修士論文発表会]

・高行健の戯曲研究 山脇 水園

[卒業論文発表会]

- ・五斗米道における治療行為とその宗教的意味 片岡 純也
- ・米芈における平淡と天真 池田 千晶
- ・蘇轍『老子解』における「道」について 渡邊 秀一
- ・朱熹の孔子観—『四書集注』を中心に— 加藤 祐一
- ・佐藤一斎の思想について—『伝習録欄外書』をてがかりに— 綿谷浩太郎
- ・日中同形語に関する考察 小林真登香

○4月例會

4月12日(新入生歓迎会)

- ・明代思想研究の愉しみ 三浦 秀一
(渡部健哉 記)

◎東北中国学会

第57回大会 5月24日、25日

第1日 於北海道大学

[研究発表]

- ・元祐の吏額房—宋三省制の一側面— 東北大学 熊本 崇
- ・哈佛大学本『華英通語』序文の「唐音不正」について 京都産業大学 矢放 昭文

[公開講演]

- ・魯迅『呐喊』自序を読む 元東京大学教授 丸尾 常喜(代読)

第2日 於小樽朝里クラッセホテル

[研究発表]

第一分科会(文学・哲学)

- ・道藏本『女青鬼律』に見える鬼神觀念の諸相 東北大学大学院 佐々木 聡
 - ・李商隱「景陽宮井双桐」詩について 東北大学 大山 岩根
 - ・「南柯太守伝」の時空と語りの枠 大東文化大学大学院 葉山 恭江
 - ・章学誠の「経世」観について 東北大学大学院 尾崎順一郎
 - ・張若谷と戦争文学 大阪教育大学 中野 知洋
- ※第二分科会(史学)は省略

◎東北大学中国文学談話会

第168回中国文学談話会 2008年7月15日

[卒業論文構想発表会]

- ・モチーフによる『詩経』所収詩の考察 高橋 良知
- ・長恨歌と源氏物語 荒川 里奈
- ・『平妖伝』の研究 岡島 君和

第169回中国文学談話会 2008年7月22日

[卒業論文構想発表会]

- ・『老子』注釈書から見るそれぞれの『老子』観 関場 美紀
- ・六朝から唐代にかけての近体詩成立に関わる文学理論—四声と平仄を中心に— 薪 塩悠
- ・『聊齋志異』—く狐とく幽鬼の違い 土田かおり

第170回中国文学談話会 2008年11月15日

[卒業論文中間発表会]

- ・『詩経』における「興」についての一考察 高橋 良知
- ・六朝から唐代にかけての文学理論と近体詩との関わりについて—病犯論の展開からみた近体詩律— 薪 塩悠
- ・長恨歌と源氏物語 荒川 里奈

◎筑波中国学会

○例会

5月8日(木)

- ・王漁洋の女性を詠ずる詩について—「南唐宮詞」・「秦淮雜詩」を中心に— 荒井 禮

6月12日(木)

- ・王勃の思想について—平台秘略論を手がかりに— 有馬 みち

6月19日(木)

- ・魚玄機の詩について—詩語のイメージの崩壊— 大塚 千晶

9月18日(木)

- ・『水滸伝』の燕青像成立過程の一考察—燕青・徽宗・高俅の比較の中で— 花岡 垂希

10月9日(木)

- ・歴史としての『聊齋志異』 高橋 恒輔

11月13日(木)

- ・沈約の文学にみえる隠逸観 北島 大悟

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第27号(3月)

(稀代麻也子 記)

◎中国文学学会

○例会

3月8日(土) 於筑波大学東京キャンパス
・王漁洋の新楽府について 筑波大学院 荒井 禮
・呉昌碩と水野疎梅 大妻女子大学 松村 茂樹

4月26日(土) 於二松学舎大学
・阮籍の四言(詠懐詩)をめぐって
文教大名譽教授 沼口 勝

10月5日(日) 於青山学院大学
・元結「春陵行」再論—「漫叟」の視座—
千葉大学 加藤 敏
・華夷思想と讖緯と浮屠 福島大名譽教授 大久保隆郎

12月6日(土) 於青山学院大学
・明治中期の新式貸本屋と漢籍目録
二松学舎大学 佐藤 一樹
・「山公啓事」における貴族の自律性
大東文化大学 渡邊 義浩

○大会

6月28日(土) 於横浜市立大学金沢八景キャンパス
[研究発表]

・張資平作品にみられる恋愛用語
筑波大学院 清地ゆき子
・「文心雕龍」の言語思想—「隱」義考序説—
筑波大学院 和久 希
・唐代遊俠詩の変質—王維「少年行」をめぐって—
筑波大学院 齋藤 聡
・王勃「平台秘略論」に関する一考察

筑波大学院 有馬 みち
・沈約の隱逸思想と文学 筑波大学院 北島 大悟
・李白「黄鹤楼送孟浩然之广陵」における「烟花」につ
いて 北海道教育大学 大橋 賢一
・李陵・蘇武詩の成立の場 県立広島大学 柳川 順子
・二つの「桃花源記」から読み取れるもの
大東文化大学 門脇 廣文

・漱石詩の仮構(初探)—修善寺仰臥十二首をめぐる一
側面— 青山学院大学 大上 正美
[講演]

・金沢八景の歴史と変遷
神奈川県立金沢文庫主任学芸員 永井 晋

○刊行物

『中国文化』第66号(6月)
(稀代麻也子 記)

◎六朝文学学会

○例会

第17回研究例会(3月15日 於二松学舎大学)
・二陸贈答詩中の東南士族 清華大学 孫 明君
・賈誼の二十四友に関する二三の問題

京都外国語大学 福原 啓郎
・嵇康と「積私論」 青山学院大学 大上 正美
第18回研究例会(12月13日 於二松学舎大学)

・天台の外典利用—天台注釈書に引用された「博物志」
のある一条より 京都大学大学院 佐藤 礼子
・「文心雕龍」総序篇における「術」の概念について
中部大学 竹澤 英輝

・古詩十九首の音楽と主題
湖南師範大学・京都大学 楊 合林

○大会

第12回大会(6月15日 於斯文会館)
[研究発表]
・嵇康の「声無哀楽論」について—「楽」の解釈を中心に
京都大学大学院 穴戸 友紀
・西晋武帝の弟・司馬攸について

大東文化大学 小池 直子
・王弼の「象」とその背景 大阪大学 辛 賢
・鮑照の「河清頌」の迎会的性格とその意図
日本学術振興会特別研究員 土屋 聡

[記念講演]
・六朝志怪流行の背景を探る
東京大学・明海大学名誉教授 竹田 晃

○刊行物

『六朝文学学会報』第9集(3月末日)
(平井 徹 記)

◎国士舘大学漢学会

○第42回大会(2月17日)
会場 世田谷校舎10号館10329教室
[卒論発表]

・「孫子」研究 石田 一希
・「貞観政要」研究 我 満奈美
・「荀子」研究 星 克彦
・「西遊記」における龍について 白幡 由記

[卒業生報告]
・北京留学を終えて
筑波大学大学院博士課程 齋藤 聡

[研究発表]
・「聊齋志異」研究序説
国士舘大学修士1年 石井 隆也
・神祇令神社祭祀考 国士舘大学教授 藤森 馨
[特別講演]

・魏晋南北朝期における八句詩形の展開について
筑波大学名誉教授・国士舘大学講師 向嶋 成美

○作詩交流セミナー
・蘇州大学(8月20日~29日)
指導 鷲野正明
参加学生 7名

○第43回大会(10月29日)

会場 世田谷校舎10号館10329教室

[海外活動報告]

・蘇州大学作詩セミナー 国士館大学教授 鷺野 正明

[研究発表]

・二神約諾神話とは—中世に誕生した神話—

国士館大学教授 藤森 馨

・中林梧竹の書論—正・奇の論と「復帰」の思想について—

国士館大学教授 内村 嘉秀

[特別講演]

・現代新儒家について

前筑波大学教授・国士館大学講師 中村 俊也

○刊行物

『国士館大学漢學紀要』第10号（2008年3月）

（鷺野正明 記）

◎日本漢文小説研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

5月11日

・論文集発刊について

・藍沢南城「老狐禁夫殺生記」について 内山 知也

7月27日

・風来山人『刪笑府』の特色と翻刻の問題点—IT研究会をとおして— 川邊 雄大

10月5日

・明治期の上海における邦人の活動について—『滬游雜記』と東本願寺上海別院における日中文化交流を例として— 川邊 雄大

12月21日

・国際学術討論会「異時空下の同文詩寫—臺灣古典詩與東亞的交錯」参加報告 巖 明、川邊 雄大

・明治時代的二松學舎和臺灣—以佐倉孫三爲中心—

川邊 雄大

（鷺野正明 記）

◎明清文人研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

4月13日

・研究論集『徐渭』編集会議

6月29日

・研究論集『徐渭』編集会議

9月21日

・研究論集『徐渭』編集会議

11月16日

・「近年来中国大陆の明代文学研究」

陳 正宏

（河内利治 記）

◎宋詞研究会

○研究会及び例会

9月5日(土)、6日(日) 『唐宋名家詞選』譯注検討會

（於中京大學中京大學文化科學研究所）

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

1月12日(土)至12月27日(土) 小風絮會

（於立命館大學文學部中國文學專攻共同研究室）

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および検討

○刊行物

『風絮』第4号（3月）

（萩原正樹 記）

◎宋代詩文研究会

一、『橄欖』第15号の発行

二、第12回宋代文学研究談話会 5月24日

於立命館大学

（宋詞研究会、文科省科研費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」詩文受容班と共催）

◆午前の部

（1）龍沐勳『唐宋名家詞選』における呉文英詞

京都兩洋高等学校非常勤講師 池田 智幸

（2）《錦繡萬花谷・別集》的編刻及其保存的宋代佚詩

北京大學中文系 王 嵐

（3）『東坡集』の編纂と蘇過

九州大學大學院人文科學府 原田 愛

◆午後の部

（4）詞學史上的清空論

南開大學中文系 孫 克強

（5）蘇軾の和陶詩と陶淵明の原詩との對比—形影神の詩を例として—

筑波大學大學院人文社會科學研究科 山口 若菜

（6）石介の文風取向及其對韓文藝術傳統的接受

武漢大學中文系 熊 禮匯

（7）詩經解釋學的方法的概念の展開と宋代詩經學の位置

慶應義塾大學商學部 種村 和史

（8）歐陽脩《居士外集》文編年補正

上海商學院 洪 本健

三、特別講演會

①10月18日 於早稲田大学

情愛描写与詞体的興起

中国人民大学国学院 諸葛 憶兵

②12月13日 於早稲田大学

南宋中日僧人（詩僧）の交流及影響

北京大學中文系 許 紅霞

（内山精也 記）

◎日本アルタイ語会議
(Altaistic Conference of Japan)

○研究発表

第4回 日本アルタイ語会議

2008年11月22日(土) 午後2時より5時。

於大東文化会館セミナー室

テーマ:「アルタイ諸語と文献研究」

司会 中嶋 幹起

発表者:

1. 城田 俊

「ハザール研究と唐代史料—『唐書』『経行記』『西陽雜俎』のハザールへの言及」

2. 竹内 和夫

「ニホン初のモンゴル・満洲語の記述」

○刊行物

『アルタイ語研究 II』(3月末日)

(中嶋幹起 記)

◎中唐文学会

[大会]

佛敎大学 紫野キャンパス 1号館5階 大会議室

[日程]

10月13日(月)

8時30分 受付開始

9時00分 研究発表

司会:浅見 洋二

発表① 「詩僧と苦吟」

傍島 史奈

コメント:乾 源俊

10時00分

発表② 「唐代詩僧と士大夫の関係—応酬詩からみる詩僧の立場—」

福井 敏

コメント:赤井 益久

(小休憩)

11時10分 講演

「詩僧皎然と靈澈」 大谷大学名誉教授 河内 昭圓

12時30分 総会

(乾 源俊 記)

◎名古屋大学中国文学研究室

○名古屋大学中国語文学会第17例会

6月28日(土) 於名古屋大学文学部237講義室(旧7講)

[講演]

・鄭谷の杜甫論—晩唐の杜詩受容

加藤 国安

[研究発表]

・青木正児が中国滞在中に収集した資料について—戯曲資料と図像資料を中心に

中塚 亮

○研究会

7月25日(金)

於中国文学研究室リテラボ

・「十八史略」の諸葛亮像—「三国志」との違い

金 霽彤

・才子佳人小説の「変質」—特にその武俠小説化傾向について

花村 昭紀

・左傳における事件構築の方法について—作中人物の「行為」と「意図」について

竹内 航治

11月28日(金)

於中国文学研究室リテラボ

・銭謙益の忠節観

新美香葉子

・正史三国史・諸葛亮伝の特徴分析

金 霽彤

・左傳の文学的分析—作中人物の「行為」と「意図」を中心として

竹内 航治

○刊行物

『名古屋大学 中国語文学論集』第20輯

青木正児編『戯単』『前臺梁塵録』『門票』『講学来函』『鷄肋』(写真複製)

『中国社会科学院藏「青木正児博士、胡適宛書簡集」』(写真複製)

(加藤国安 記)

◎東海中国語教育研究会

日本中国語学会東海支部例会

日 時:2008年10月4日(土) 14:00~17:00

会 場:南山大学名古屋キャンパスJ棟1階特別合同研究室(Pルーム)

発表者氏名とテーマ:

・关于“吃X”的句法结构及语义对展

愛知淑徳大学 曹 志偉

・謝り表現における「对不起」と「不好意思」の役割についての考察

中京学院大学 李 謹

(時 衛国 記)

◎京都大学中国文学会

○中国文学会第23回例会

7月12日(土) 京都大学時計台百周年記念館

・状元宰相の饒舌—文天祥『指南録』を読む

稲垣 裕史

・校勘から生成論へ—宋代における詩文集の注釈、特に蘇黄詩注をめぐる—

浅見 洋二

・中華学人追憶

横山 弘

○刊行物

『中国文学報』第75冊(4月)

『中国文学報』第76冊(10月)

(成田健太郎 記)

◎中国藝文研究会

○合評會及び研究会

1月20日(日)

研究会(立命館大學中國文學專攻共同研究室)

・張家山漢簡『蓋廬』についての一考察

石井眞美子

・太初改曆—曆術甲子篇と八十一分律曆の再検討—

山内 貴

・樂廣の夢説をめぐる後代の諸説

今場 正美

・關羽の青龍偃月刀、別名「冷艶鋸」についての一考察

岡本 淳子

5月11日(日)

合評會(立命館大學清心館501號)

・『學林』第46・47號合併號「白川靜先生追悼記念論集」

合評

7月13日(日)

研究会(立命館大學中國文學專攻共同研究室)

・阮籍『詠懷詩』における憂い解消について

鈴木 俊哉

・唐詩の隱喻と詩人の認知

洪 玉芳

・宋代『青玉案』詞考

池田 智幸

・義湘・善妙説話の成立

谷口 義介

・現代中國語の諸方言における入聲韻の體母音の差異

董 偉華

12月14日(日)

合評會(立命館大學中國文學專攻共同研究室)

・『學林』第48號合評

○刊行物

『學林』第46・47號合併號「白川靜先生追悼記念論集」(3月)・第48號(11月)

◎大谷大学中国文学会

○大谷大学文藝学会公開講演会

7月1日 大谷大学響流館メディアホール

・邵雍の「洗竹」詩をめぐる

大阪大谷大学教授 森 博行

○中国文学会卒業論文中間発表会

10月29日 大谷大学講堂棟5階談話室

・太公望について

・『孫子』の「守」の思想について—「形篇」「勢篇」を中心に—

・汪曾祺の作品と仏教との関連について

・「長恨歌」と「長恨歌伝」について

・文学作品における胡笳

・阿Qの精神～日本人の受け取り方～

○中国文学会学術公開講演会

12月19日 大谷大学響流館マルチメディア演習室

・科学と占いのあいだ 出土簡帛の新証言

京都大学人文科学研究所教授 武田 時昌

○刊行物

・『文藝論叢』第70号(3月)

・『文藝論叢』第71号(9月)

(堂蘭淑子 記)

◎東山之會

○研究発表 於京都女子大學

2月23日

・管樂所奏に関する一考察

一澤 美帆

3月29日

・ああ大丞相死すべし—宋・王炎午「生祭文丞相」とその時代—

稲垣 裕史

5月10日

・『禮記』『樂記』與『史記』『樂書』

楊 合林

6月7日

・日本漢詩と古典和歌における蟬

劉 小俊

7月19日

・今人も古に及ぶ—皎然の文學史觀—

永田 知之

8月20日～22日(長野縣上高地合宿)

・皎然詩研究の現状

乾 源俊

・例句集としての『詩式』を考えてみる

赤井 益久

9月20日

・唐代詩僧と士大夫の關係—応酬詩からみる詩僧の立場—

福井 敏

11月1日

・王維詩歌的空間意識

張 紅

12月6日

・上海での経眼書などについて

芳村 弘道

○『杼山集』譯註(2月23日至12月6日)

卷一「七言晚秋破山寺」至「五言酬邢端公濟春日

蘇臺有呈袁州李使君兼書并寄辛陽王三侍御」

(愛甲弘志 記)

◎阪神中哲談話会

第378回例会 3月15日

(於関西大学アジア文化交流研究センター)

・中国古代における外国の影響—エジプトの神ベスの図像的影響—

重信あゆみ

・墨家集団における「鬼」の位置付け

嘉村 誠

第379回例会 6月14日

(於関西大学アジア文化交流研究センター)

・幕末の懷徳堂再興運動—並河寒泉の日記『居諸録』から—

矢羽野隆男

第380回例会 9月27日

(於関西大学アジア文化交流研究センター)

・『黄帝内経』の氣について—先秦・漢代の諸文献と比較して—

熊野 弘子

第381回例会 12月13日

(於ホテルピノ京都堀川)

- ・ミル『自由論』の諸問題 (厳復 訳) 後藤 延子
(橋本昭典 記)

◎大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

○国内研究会

[卒業論文構想発表]

平成20年7月16日 (於待兼山会館特別室)

- ・『管子』弟子職における教育観 久保 宗之
- ・鄭玄と王肅との比較—『儀礼』喪服経伝への注を中心に— 竹村 渉
- ・中井竹山の経済観—『草茅危言』を中心に— 豊島 和也

- ・『呂氏春秋』に見る中国古代の音楽観 南浦 孝之

[卒業論文中間発表]

11月5日 (於待兼山会館会議室)

- ・『管子』弟子職について 久保 宗之
- ・『儀礼』喪服経伝への鄭玄注に就いて—馬融及び王肅と比較して— 竹村 渉
- ・中井竹山の経済観—『草茅危言』を中心に— 豊島 和也
- ・古代中国の音楽思想—『呂氏春秋』を中心に— 南浦 孝之

[第8回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会]

11月15日 (於西尾市岩瀬文庫地下研修ホール)

- ・張家山漢簡『蓋廬』にみえる兵権謀家的思想 福田 一也
- ・道家思想の「自然」の起源について キング・ロバート・ジェームズ
- ・『三言』の韻文と散文について—「韻文雑言」と「散文駢化」を中心に— 陳 洲

○国際学術交流

[研究発表 (共同開催)]

平成20年10月25日 (於致遠管理学院 [台湾])

- ・国際学術検討会—東アジア文化の発生・変遷・交流—
なお、本検討会における発表成果の一部を、小特集の形で『中国研究集刊』第48号 [麗号] に掲載。

○刊行物

『中国研究集刊』第46号 [金号] (6月)

『中国研究集刊』第47号 [生号] (12月)

◎戦国楚簡研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/>

○国内研究会合

[第35回研究会]

平成20年10月10日~11日

(於ホテルアイボリー [大阪府豊中市])

- ・張家山漢簡『鬲廬』と『孫子』 福田 一也
- ・別筆と篇題—『上博(六)』所収楚王故事四章の編成— 福田 哲之
- ・山東省学術調査報告について
「山東省博物館」「銀雀山漢墓竹簡博物館」 竹田 健二
「武氏墓群石刻博物館」 福田 哲之
- ・平成21年度科学研究費補助金の申請について 湯浅 邦弘
- ・平成17年度~20年度科研報告書について 湯浅 邦弘

○国際学術交流

[学術調査]

平成20年9月2日~8日、山東省学術調査 (科学研究費基盤研究B、2005~2008年度、代表者湯浅邦弘)

参加者：浅野 裕一 (東北大学大学院)

湯浅 邦弘 (大阪大学大学院)

福田 哲之 (鳥根大学)

竹田 健二 (鳥根大学)

草野 友子 (大阪大学大学院院生)

白 雨田 (大阪大学大学院院生)

福田 一也 (日本学術振興会特別研究員)

なお、本調査の詳細を、「中国山東省学術調査報告」として『中国研究集刊』第48号 [麗号] に掲載。

◎懐徳堂研究会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/index.html>

(大阪大学中国哲学研究室 HP 内)

○国内研究会合

[第11回研究会]

平成21年1月31日 (於待兼山会館特別室)

- ・『論語逢原』『孟子逢原』の標点の施し方の問題点について 湯城 吉信
- ・並河寒泉の対幕府・新政府観 矢羽野隆男

◎中国中世文学会

○平成20年度研究大会

10月25日(土) 於広島大学文学研究科

- ・六朝の行旅詩について—旅立ちの詩を中心に— 佐伯 雅宣
- ・折楊柳考—「寄遠」から「贈別」へ— 佐藤 大志
- ・消えた秦女休—唐詩に描かれなかった女性像(二)— 橘 英範
- ・韓愈の初期の文章について—対比表現と反語表現に着目して— 渡辺志津夫
- ・『金瓶梅』を読んだ人たち 川島 優子
- ・『觀世音應驗記』百濟本考 衣川 賢次
- ・全祖望と杭州詩人たち 市瀬 信子

- ・沈約『宋書』謝靈運傳について 森野 繁夫
 ○例会 於広島大学文学研究科
 1月31日
 ・『蒙求和歌』研究—訳注の作成など諸問題— 章 剣
 2月21日
 ・埋葬の意義の考察—『太平広記』を中心に— 許 飛
 5月22日
 ・韓愈の古文の魅力—初期の文章を中心に— 渡辺志津夫
 6月26日
 ・現代中国語の語彙語法研究—可能補語を中心に— 武内 真弓
 7月31日
 ・冥界の分析—『太平広記』を中心に— 許 飛
 10月16日
 ・大会発表補足資料作成
 11月27日
 ・韓愈の古文の特徴について—先駆者との比較— 渡辺志津夫
 12月18日
 ・平安時代における竹の象徴性と受容と変容—『和漢朗詠集』の竹の詩歌を中心に— 馬 里
 ・中日女流詩人の比較研究—唐宋時代の詩詞と平安時代の和歌における「抒情世界」を中心に— 彭 琦
 ・宇治拾遺物語と六朝志怪説話の比較研究—妖怪に対するイメージを中心に— 劉 暢
 ○刊行物
 『中国中世文学研究』第53号（3月）
 『中国中世文学研究』第54号（9月）
 （富永一登 記）

◎広島大学中国文学研究室研究会

- 第142回 2月18日（卒業論文最終発表会）
 ・『文選』古詩十九首研究 平山 由梨
 ・左思詩研究—「嬌女詩」を中心に— 手賀ちひろ
 ・駱賓王詩研究 種村由季子
 ・唐代小説に見られる女性 濱田 亜弓
 ・李清照詞研究—「梅」を中心に— 村上 史
 ・魯迅『祝福』研究—誰が祥林嫂を殺したか— 長田 千晶
 ・王蒙『胡蝶』研究—革命の中の人間性について— 井上 幸愛
 ・白先勇『孽子』研究—女性化と台湾の行方— 深谷 育美
 第143回 5月26日
 ・杜甫の宴席の詩について—初期を中心に— 市原 里美

- 第144回 6月30日（修士論文中間発表会）
 （修士論文中間発表Ⅱ）
 ・支通研究 宗近 倫子
 （修士論文構想発表）
 ・中国における待遇表現の異文化間交流—「非一人称代名詞」を中心として— 趙 英来
 ・日中における唐詩解釈異同の研究—『唐詩選国字解』を通して— 何 薇
 第145回 7月25日（卒業論文中間発表会Ⅰ）
 ・六朝詩にあらわれる「露」について 小西 美代
 ・江戸時代における『世説新語』の受容 小原奈津美
 ・中国古小説に見られる鳥—『太平広記』鳥の部を中心として— 吉岡 光江
 ・李煜詞研究—夢と記憶— 安部 祥子
 ・老舍著『駱駝祥子』 広瀬安佳理
 ・彭懿『魔塔』研究—ファンタジーの構築を中心として— 奥谷 佳江
 ・李馮小説研究—英雄像の解体— 梁 思睿
 第146回 12月1日（卒業論文中間発表会Ⅱ）
 ・人から見る露、露から見える世界—鮑照の詩を中心に— 小西 美代
 ・江戸時代における『世説新語』の受容 小原奈津美
 ・中国古小説に見られる鳥—『太平広記』鳥の部を中心として— 吉岡 光江
 ・李芎詞研究 安部 祥子
 ・老舍著『駱駝祥子』研究 広瀬安佳理
 ・彭懿『魔塔』研究—ファンタジーの構築を中心として— 奥谷 佳江
 ・李馮小説研究—英雄像の解体— 梁 思睿
 第147回 12月19日（修士論文中間発表会）
 （修士論文中間発表Ⅱ）
 ・漢訳仏典の人称代名詞の研究—二人称代名詞「仁」を中心として— 趙 英来
 ・日中における唐詩解釈異同の研究—『唐詩選国字解』を通して— 何 薇
 （修士論文構想発表）
 ・可能補語研究 武内 真弓
 ○刊行物
 『中国学研究論集』第20号（4月）
 『中国学研究論集』第21号（12月）
 （富永一登 記）
- ### ◎広島大学中国思想文化学教室
- 第176回研究会（卒業論文・修士論文発表）
 2月8日
 ・商鞅の變法について—『商君書』からの考察— 上口 花代
 ・「樂記」の音楽論 花岡 裕
 ・「莊子」研究 片嶋 誠

第177回研究会（卒業論文・修士論文中間発表）

11月13日

- ・ 莊子の道 魚川 葵
- ・ 「孫子」と「孫臏兵法」の戦術論 卷幡 夏希
- ・ 「世説新語」賢媛篇にみられる女性像 下田亞里紗
- ・ 孟子研究—「性」の再考— 高田 哲治
- ・ 王充研究 岡村 壽子
(野間文史 記)

◎山口中国学会

○山口中国学会例会

日時：2008年6月14日(土) 午後1時半～

場所：人文学部2号館第5講義室

[研究発表]

- ・ 湖南史学の特徴と形成 高木 智見

○山口中国学会大会

日時：2008年12月13日(土) 午後1時半～

場所：人文学部第2講義室

[講演]

- ・ 中国映画のなかの日本人
北海道大学大学院教授 野澤 俊敬

[研究発表]

- ・ 中国における『文学部唯野教授』の受容 何 曉毅
- ・ 清代後期の四川省南部県档案から見た場市設立問題
滝野正二郎
(根ヶ山徹 記)

◎香川中国学会

第68回研究発表会 2月9日 香川大学

- 一 楊貴妃と玄宗
—新旧「唐書」「楊貴妃伝」と「長恨歌」「長恨歌伝」—
高橋 瞳
- 二 郭英男（ディファン）から見る台湾原住民のアイデンティティー 長谷川麻衣子
- 三 「牯嶺街少年殺人事件」に見える外省人世界 瀬藤 真理
- 四 台湾建築—廢墟から見る台湾の都市計画 大河原沙紀
- 五 日本漫画が台湾人恋愛観に及ぼした影響について 山本 留実
(間嶋潤一 記)

◎第54回中国四国地区中国学会

5月28日 於岡山大学

- ・ 石刻「蕭和尚靈塔銘」に刻された王維の詩とその解釈について 安田女子大学 内田 誠一
- ・ 杜甫の宴席の詩について—初期を中心に—

広島大学大学院 市原 里美

- ・ 韓愈の古文の魅力—初期の文章を中心に—
広島大学大学院 渡辺志津夫
- ・ 後漢諸子における君臣関係 鳥取東高校 伊藤 浩志
- ・ 水戸志士の咆哮—狂挙をささえるもの—
徳島大学 有馬 卓也
- ・ 宝巻による「割股療親」孝行の推進について
山口大学大学院 徳永 彩理
- ・ 「鶯鶯伝」をどう読むか—「情賦」との関係を中心に—
岡山大学 下定 雅弘
- ・ 談話中国古典詩歌中的「化身」現象—以「閑情賦」為中心—
岡山大学 霍 四通
[講演]
- ・ 唐代の手紙と文学—『杜家立成雜書要略』について
京都大学人文科学研究所所長 金 文京氏
(橋 英範 記)

◎九州中国学会

平成20年度（第56回）九州中国学会大会

5月10、11日 於佐賀大学

5月10日

- ・ 劉辰翁の文学活動と宋末元初の江西詩壇 奥野新太郎
- ・ 「王状元」と福建の出版業 甲斐 雄一
- ・ 代替医療におけるシャーマニズムの役割に関する一考察—台湾シャーマン・タンキーによる民俗医療を中心に—
王 貞月
- ・ 「莊子」齊物論篇の「有未始有始也者」について
橋崎洋一郎
- ・ 明末刊『唐詩解』所載の「長恨歌」の本文について
神鷹 徳治

5月11日

- ・ 荀子と董仲舒の「性」 近藤 則之
- ・ 孔広森の公羊思想について 木本 拓哉
- ・ 郭沫若の1955年福岡訪問と旧体詩 岸田 憲也
- ・ 中国語教育における古典教育を巡って 甲斐 勝二
- ・ 科学研究費補助金(基盤研究C)「21世紀の漢文教育テキストの作成—長崎から世界へ—」中間作業報告
荒木龍太郎・石井 望・岡村真寿美

○刊行物

『九州中国学会報』第46巻（2008年5月）

(中里見敬記 記)

◎九州大学中国文学会

○中国文藝座談会

第233回 2008年1月26日

- ・ 中国古典にあらわれた弓—『史記』を中心に—
新谷 彩

- ・ 雨月物語「菊花の約（ちぎり）」と中国 宮崎 聡子
- ・ 宮女の貞節—『隋唐演義』朱貴児をめぐる— 旦部 啓子
- ・ 『東坡集』の保存と息子蘇過の役割 原田 愛

第234回 2008年3月1日

- ・ 南宋福建建陽版が「王状元」を冠する意義—『王本東坡集』注釈者を中心に— 甲斐 雄一
- ・ 伝奇から話本へ—才子佳人小説の変遷を中心に— 黄 冬柏

第235回 2008年4月26日

- ・ 劉辰翁の文学活動と宋末元初の江西詩壇 奥野新太郎
- ・ 郭沫若の一九五五年福岡訪問と旧体詩 岸田 憲也
- ・ 周作人のなかの古典—李卓吾とのかかわりから— 吳 紅華

第236回 2008年7月19日

- ・ 竟陵派の盛行と『唐詩選』出版 有木 大輔
- ・ 濱文庫の明清楽資料および唱本について 中尾友香梨
- ・ 東坡尺牘の編年問題 朱 剛

第237回 2008年9月13日

- ・ 左思「三都賦」にみえる三国の都城 栗山 雅央
- ・ 『欽定古今圖書集成』挿図の蔣廷錫による改編—内閣文庫蔵『古今圖書集成図纂（仮題）』を手がかりとして— 大瀨 貴之
- ・ 周作人新詩の位相—1919年を中心に— 鳥谷まゆみ

第238回 2008年11月8日

- ・ 李賀「歌詩集」の成立と変遷 長谷川真史
- ・ 高校国語科における唐詩教育の役割 金山 真吾
- ・ 「一代有一代文学」之說的意義行変 羊 列榮

○刊行物

『中国文学論集』第37号（2008年12月）

- 学会・研究会開催
- 北京大学「中日文化交流史」研究発表会（2008年1月16日）
- ・ 論近世中日間の華夷秩序之争 徐 博晨
- ・ 中国蘇杭地区中日交流史迹考察報告 倪 堯卉
- ・ 在中国の空海史迹考察研究 王 善涛
- ・ 関于中日文化交流史的特点与分期 滕 軍

- 九州大学宋代文学講演会（2008年5月22日）
- ・ 校箋歐陽脩詩文之感悟 華東師範大学 洪 本健
- ・ 浅談王安石古文議論、説理的芸術特色 武汉大学 熊 礼匯

郭沫若九大留学90周年記念 郭沫若研究国際学術集会（2008年9月1日～2日、日本郭沫若研究会主催）

- ・ “郭沫若与日本”在郭沫若研究中 蔡 震
- ・ 文物与图片專題展：《跨着東海—郭沫若与中日文化交流》 郭 平英
- ・ 留学生・中国科学院院長の郭沫若が見た福岡・博多 岸田 憲也
- ・ 1940年代的郭沫若及其抗戰、抗戰歴史劇 賈 振勇

- ・ 郭沫若歴史劇と菊菊隠 瀬戸 宏
- ・ 郭沫若の英詩訳 大高 順雄
- ・ 郭沫若：在文学与政治背後的医学眼光 陳 俐
- ・ 『女神』における詩的言語としての科学 横打 理奈
- ・ 沫若《女神》与毛沢東詩詞—中国現代詩歌主体精神建構的一種模式 陳 曉春
- ・ 郭沫若：浪漫主義文心与詩論 黄 曼君
- ・ 郭沫若的甲骨研究—郭沫若与田中慶太郎 成家 徹郎

- ・ “歌斯迭里”の文学史意義—郭沫若的自我定位与我們对郭沫若的定位 李 怡
- ・ 横站：青年郭沫若—以《論中德文化書》為例 廖 久明

- ・ 郭沫若と聞一多—聞一多の郭沫若『女神』評価を巡って 鈴木 義昭
- ・ 郭沫若の古代研究—近代学術におけるその位置づけ 牧角（竹下） 悦子

- ・ 韓国接受郭沫若の歴史与特点—包括新發掘的資料 朴 宰雨
- ・ 郭沫若著作在人文社的出版及其編輯出版活動 岳 洪治

- ・ 郭沫若留学日本の多重生意義 税 海模
- ・ 郭沫若の万宝常研究の動機に関する考察 藤田 梨那
- ・ 在漂泊中尋找帰属—郭沫若身辺小説中的身份焦慮与自我建構 魏 紅珊
- ・ 泰戈爾究竟怎样影響了郭沫若 魏 建

- ・ 狂暴与柔情—大海賦予《女神》的兩種性格 武 繼平
- ・ 『女神』と海水浴 小崎 太一
- ・ 郭沫若初期詩歌における大正期日本詩歌の影響 岩佐 昌暉

- ・ 郭沫若がしたための聶耳墓志銘の削除問題について 齊藤 孝治
- ・ 知識分子立場及其異化—論郭沫若の文芸大衆化思想 張 伝敏

- ・ 《女神》：男人的生命歌唱 周 海波
- ・ 郭沫若早期詩風、詩芸的選択与白話新詩の可能性 朱 寿桐

- ・ 郭沫若の甲骨研究—郭沫若与田中慶太郎 成家 徹郎
- ・ “歌斯迭里”の文学史意義—郭沫若的自我定位与我們对郭沫若的定位 李 怡
- ・ 横站：青年郭沫若—以《論中德文化書》為例 廖 久明
- ・ 郭沫若と聞一多—聞一多の郭沫若『女神』評価を巡って 鈴木 義昭
- ・ 郭沫若の古代研究—近代学術におけるその位置づけ 牧角（竹下） 悦子
- ・ 韓国接受郭沫若の歴史与特点—包括新發掘的資料 朴 宰雨
- ・ 郭沫若著作在人文社的出版及其編輯出版活動 岳 洪治
- ・ 郭沫若留学日本の多重生意義 税 海模
- ・ 郭沫若の万宝常研究の動機に関する考察 藤田 梨那
- ・ 在漂泊中尋找帰属—郭沫若身辺小説中的身份焦慮与自我建構 魏 紅珊
- ・ 泰戈爾究竟怎样影響了郭沫若 魏 建
- ・ 狂暴与柔情—大海賦予《女神》的兩種性格 武 繼平
- ・ 『女神』と海水浴 小崎 太一
- ・ 郭沫若初期詩歌における大正期日本詩歌の影響 岩佐 昌暉
- ・ 郭沫若がしたための聶耳墓志銘の削除問題について 齊藤 孝治
- ・ 知識分子立場及其異化—論郭沫若の文芸大衆化思想 張 伝敏
- ・ 《女神》：男人的生命歌唱 周 海波
- ・ 郭沫若早期詩風、詩芸的選択与白話新詩の可能性 朱 寿桐

（岸田憲也 記）

第61回大会開催のお知らせと発表者募集

会員各位

陽春の候、会員各位におかれましては益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第61回大会は文教大学が準備を担当し、本年10月10日(土)、11日(日)の両日に開催することになりました。

つきましては、下記の要領で研究発表者を募集いたしますので、奮って御応募くださいますようお願い申し上げます。

記

部会 一、哲学・思想 二、文学・語学

時間 発表 20分 質疑応答 10分

締切 6月末日(消印有効)

◎本年は、一、哲学・思想 二、文学・語学の二部会を予定しておりますが、応募状況によっては部会の増設も考えております。

◎発表は、学術的研究の最新の成果で未公開のものに限ります。発表御希望の方は、氏名(フリガナ・地区・所属)・希望発表部会を明記の上、印字した発表題目および概要(800字以内、テキスト形式の電子ファイル添付)を、締切日までに大会準備会宛にお送りください。なお執筆者による校正はありませんので、完全原稿でお願いいたします。応募者多数の場合は、やむを得ずお断りすることもございますので、御了承ください。

2009年4月

日本中国学会第61回大会準備会 代表 謡口 明

〒343-8511 埼玉県越谷市南荻島3337

文教大学文学部

中国語中国文学科準備室内

連絡先

TEL: 048-974-8811 (大学代表)

FAX: 048-974-8972

E-mail: zhongwen@koshigaya.bunkyo.ac.jp

◎個人情報取り扱いについて

個人情報の保護に関する法律の施行により、当学会においても学会名簿記載の個人情報に関して、慎重な対応が求められるようになりました。平成17年度第2回理事会、ならびに評議員会での討議を踏まえて、平成18年以降発行の名簿において、会員本人からのお申し出があった場合には、記載項目のうち住所・電話番号を不掲載とする(名簿には「不掲載」と記載)こととしています。

しかしながら会員相互の連絡の便を図るという名簿本来の目的に照らすと、一方では相当の支障の生ずることも懸念されますので、特段の事情がない限り、できるだけ記載にご協力くださいますようお願いいたします。

なお、不掲載を希望される会員は、その旨を同封の会費払込取扱票の通信欄にご記入ください。

訃報

昨年度『学会便り』第2号発行以降、次の会員が逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(敬称略)

鎌田 正(関東地区) 2008年6月13日

北村 信男(中国・四国地区)

◎住所変更と名簿への掲載について

住所・所属機関等の変更は、速やかに事務局までご通知ください。通知は、書面もしくはファックス、振替用紙通信欄にてお願いします。10月発行の会員名簿には、8月未までにお知らせいただいた会員情報を掲載させていただきます。それ以降の変更については次年度に掲載となりますので、ご了承ください。